

遠隔型表現運動における実践報告

－ 教員養成系学生を対象として －

鴨林 楓奈 (横浜国立大学)

1. 目的

本研究では、教員養成課程の遠隔型表現運動受講者の自由記述をもとにした、体育実技における遠隔授業実践の効果・課題の事例検討を目的とする。

2. 研究方法

- 1)対象者 横浜国立大学教育学部1年生240名
2)調査方法 受講者はGoogle Formに遠隔型表現運動を受講した感想(自由記述)、身体表現に関する自己評価¹⁾(5件法)に回答した。授業評価の変容ならびに回答の信頼性を確保するために、授業後調査(7~8月)と回顧調査(10月~11月)の2回にわたり、同じ質問に回答した。
3)分析方法 KH Coder 3・共起ネットワーク分析にて抽出した最頻語「楽しい」に対峙する苦手意識「恥ずかしい」・「難しい」²⁾を着目語とし、語の使用要因と周辺言葉の変容を明らかにした。

3. 結果と考察

1)授業デザイン・教師行動

授業はZoomのブレイクアウトルームを用いたグループ活動が中心で、教員は学生の表現の工夫を意図的にかつ積極的にほめていた(図1)。教員が使用する言葉を考慮した上で、受講者による自由記述に

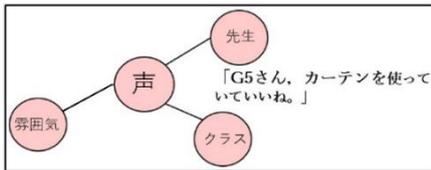


図1:教師行動に関する共起ネットワーク図

表1:遠隔型表現運動の効果と課題

効果	課題
①運動機会の確保	①活動スペースの確保
②仲間とのつながりの確保	②オンライントラブル対応
③表現運動の特性の感得	③雰囲気や表情の分かりづらさへの対応
④恥ずかしさの低減	④表現の苦手意識への対応
	⑤恥ずかしさの生成

2)「楽しい」要因

授業後・回顧調査ともに「楽しい」は<1>表現、<2>仲間とのつながり、<3>運動の基本的欲求充足に連動する傾向があり、全42件のうち<1>12件(32%)、<2>10件(23%)、<3>9件(20%)であった。また、「小さい枠にしか自分が映っていないため、苦手の表現運動も楽しく体を動かせた」との感想は遠隔型授業の特長と判断できる。さらに、授業後・回顧調査ともに「個性的な表現に目がいく」が「楽しさ」により結びつく結果は注目に値する。

3)「恥ずかしい」・「難しい」要因

「楽しい」の対峙語「恥ずかしい」は、<1>表現に対する苦手意識、<2>初対面、<3>オンラインが主に結びつく。<3>には「画面の前で踊るのは恥ずかしかった」という意見が頻出し、3-2)をふまえてオンラインツールの捉え方に個人差があると推察される。

また、「難しい」は<1>表現に対する苦手意識、<2>オンラインが主に結びつく。<2>は表1の課題①~③・⑤の内容に合致し、遠隔型表現運動の授業を展開する上での改善点かもしれない。

4. 結論

本研究では、体育実技における遠隔授業実践の効果と課題の事例を表1の通り報告する。本授業を「楽しい」と評価する学生が「個性的な表現に目がいく」特異性は否定できない。さらに、表1に示した課題の解決に向けて、本授業で教員が学生の工夫を積極的にほめていたように、他者の動きへの注視をうながす、教師行動・授業デザインの試行錯誤が求められると考える。

5. 主な参考文献

- 1)和光理奈, 眞崎雅子(2018) 小・中学校教員のダンス授業と苦手意識の考察. 中京大学体育研究所紀要. 第32巻, pp.13-18.